

長崎の教会群とキリスト教関連遺産 — 長崎から世界遺産を！ —

第3回目



長崎でのキリスト教の歴史の第一歩
(現在の平戸港と平戸城)



長崎県世界遺産登録推進室

■はじめに

世界遺産候補「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」は、伝来と繁栄、激しい弾圧と250年もの潜伏、そして世界に類を見ない独自の「キリスト教の伝播と浸透のプロセス」を示しています。今回から、この450年以上にわたる人間の歴史と感動のドラマを、構成資産の紹介とあわせて、シリーズでお伝えしていきます。

今号は、16世紀にフランシスコ・ザビエルが訪れ、17世紀初頭の世界地図にはその名前が記されていた平戸の状況と、その後、貿易港が長崎に移るまでをご紹介します。



ザビエルの3度の来訪を記念して建てられた「聖フランシスコ・ザビエル記念聖堂」(平戸市)に立つザビエル像

■平戸から始まるキリスト教の広がり

はじめてポルトガル船が平戸に入港した1550年、同じ年の8月にイエズス会の宣教師、フランシスコ・ザビエルが平戸に上陸します。この上陸が、長崎でのキリスト教の歴史の第一歩となりました。

平戸の領主、松浦隆信^{まつら たかのぶ}は、ポルトガル船の船員達が尊敬するザビエルを好意的に迎え、領内での布教活動を許可しました。隆信は、ポルトガル貿易が布教と深く結びつき、宣教師を保護すれば、交易の富につながることをよく知っていました。

ザビエルは、3度の短い滞在で約100人を信者にしたとの手紙を残しています。

当時は、平戸を窓口ポルトガル・中国・日本という交易ルート

ができあがりつつあり、平戸は東シナ海の海上交通・交易の要所でした。ポルトガル船は最初、中国（明）貿易商（倭寇）王直配下の水路誘導で平戸に入港したとされます。

■ザビエルが去った後の平戸



安満岳（左後方）を背にした構成資産（「平戸島の聖地と集落」の一部）の春日集落（平戸市）

ザビエルが平戸を去った後も、後を引き継いだトレスやガーゴ、ヴィレラなどの宣教師たちは、平戸、生月、度島^{たくしま}をめぐり、布教を続けました。1558年には、信者は1,500人にまで増えました。

1561年10月1日付けルイス・デ・アルメイダ神父の書簡には、平戸島西岸に位置し、安満岳の麓に広がる「春日集落」（構成資産「平戸島の聖地と集落」の一部）の様子が次のように語られています。「……春日と称する別のキリシタン集落へ向かった。……春日に到着すると、我らが訪問することがすでに知られており、

十字架へ続く道は聖体の行列を待ち受ける時のような有様であった……」

ところが、1561年に、ポルトガル船と平戸の関係を険悪にする「宮の前事件」が起こります。これをきっかけに、宣教師たちは拠点を平戸から移すことを画策し、大村純忠^{すみただ}の招きに応じて、横瀬浦（現在の西海市）を開港しました。

■日本初のキリシタン大名の誕生

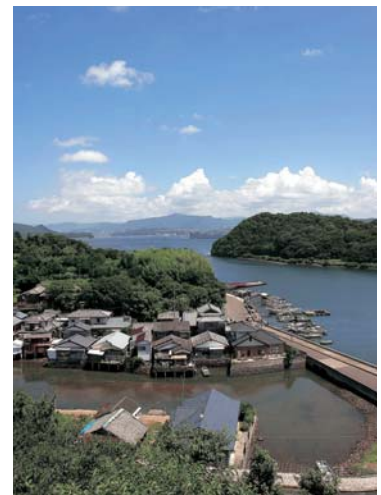
島原半島を支配していた有馬氏から大村氏の養子となって家督を継いだ純忠は、常に、身内や近隣の領主から攻撃を受けていました。その地位を確かなものにするためにも、貿易によって財政地盤を固めることは必須でした。貿易とキリスト教布教は切り離せない関係にあったことから、純忠は、キリスト教を歓迎し、自ら洗礼を受け、日本初のキリシタン大名となりました。キリスト教徒となった純忠へ宣教師たちは深い信頼を寄せました。

■わずか1年余りで消えた横瀬浦

1562年、開港された横瀬浦は、またたく間に繁栄します。しかし1563年、純忠に対する反乱によって放火され、開港からわずか1年余りで、横瀬浦は壊滅しました。

横瀬浦の焼き討ち事件後、福田に移った港は、松浦隆信によるポルトガル船襲撃にあいます。この戦いは、ポルトガル側が勝利しましたが、福田港は直接外海に面し、風波が激しく、貿易港としては適していませんでした。

こうして、福田にかわる安全な港として、長崎の調査が始まりました。



横瀬浦（西海市）